

本を読み考えよう

福沢諭吉著「福翁自伝」を読んで考える

開倫塾

塾長 林 明夫

Q この「福翁自伝」を読むのは何回目ですか。

A (林明夫。以下略)何回目か数えたことはありませんが、高校時代に初めて読み、「慶應義塾(けいおうぎじゅく)」という学校を創った福沢諭吉先生の人となりを知り、大学に行くなら慶應義塾大学に行ってみたいものだったのでした。高校の先生方、家族や親族、日本育英会、栃木県育英会のおかげで幸いにも慶應義塾大学で学ぶことができたのも、この「福翁自伝」を高校時代に読んだからかもしれません。あまり十分な勉強はできませんでしたが、慶應義塾大学で学ばなかったら今日の私はなかったといえますので、この「福翁自伝」は私の運命を変えた本といえることができます。

そうそう、この本を何回読んだのかというご質問でしたね。5年か10年に1回は読んでいますので、今回で5～6回目かもしれません。

今回「福翁自伝」を読み返したのは、開倫塾の塾生や保護者の皆様、地域社会の皆様に、月刊「開倫塾ニュース」や毎週土曜日に放送中の CRT 栃木放送のラジオ番組「開倫塾の時間」などで「本を読んで考えよう」というコーナーを設け、「このような本を読んで、考える参考にとするとよいかもしれませんよ」と私が推薦(すいせん)する本を紹介したいと考えたからです。

1冊目は、私の運命を変えた「福翁自伝」を紹介させていただこうと決めていました。

Q 「福翁自伝」は、どのような本ですか。

A 福沢諭吉先生が、68歳で亡くなる3年前にお書きになった自叙伝(じじょでん)です。先生が速記者を前にして60年の生涯を口述(こうじゅつ)、つまり口で述べ、その速記文(そっきぶん)に全面加筆を施して書き上げたものなので、とても読みやすいものです。

10代と20代の前半における、郷里である中津、遊学先の長崎、大阪の緒方塾(おがたじゅく)での自由闊達(じゆうかつたつ)な生活と勉強ぶりは、何回読んでも面白い(おもしろい)ものがあります。特に面白いのは塾生の勉強ぶり、声に出して読んでみて下さい。「およそこういう風で、外に出てもまた内にいても、乱暴(らんぼう)もすれば議論(ぎろん)もする。ソレゆえ一寸(ちよい)と一目(いちもく)見たところでは——今までの話だけを聞いたところでは、如何(いか)にも学問(がくもん)どころではなく、ただワイワイしていたのかと人が思うであらうと思いますが、そこの一段に至っては決してそうでない。学問勉強ということになっては、当時世の中に緒方塾生の右に出る者はなかろうと思われるその一例を申せば、私が安政3年(1856年)の3月、熱病(ねつびょう)を煩(わづろ)うて幸いに全快(ぜんかい)に及(およ)んだが、病中は括枕(くくりまくら)で、座蒲団(ざぶとん)か何かを括(くく)って枕(まくら)にしていたが、追々(おひ

おい)元の体(からだ)に回復して来たところで、ただの枕をしてみたいと思い、その時に私は中津(なかつ)の倉屋敷(くらやしき)に兄と同居(どうきょ)して居(い)たので、兄の家来(けらい)が一人(ひとり)あるその家来に、ただの枕をしてみたいから持って来いと言ったが、枕がない、どんなに捜してもないと言うので、不図(ふと)思い付いた。これまで倉屋敷に1年ばかり居たが、ついぞ枕をしたことがない、というのは、時是何時(なんどき)でも構わぬ、殆(ほと)んど昼夜の区別はない、日が暮(く)れたからといって寝ようとも思わず、頻(しき)りに書を読んでいる。読書に草臥(くたび)れ眠くなって来れば、机の上に突(つ)っ臥(ふ)して眠るか、あるいは床(とこ)の間(ま)の床側(とこぶち)を枕にして眠るか、ついぞ本当に蒲団を敷いて夜具(やぐ)を掛(か)けて枕をして寝るなどということは、ただの一度もしたことがない。その時に初めて自分で気が付いて「なるほど枕はない筈(はず)だ。これまで枕をして寝たことがなかったから」と初めて気が付きました。これでも大抵(たいてい)趣(おもむき)がわかりましょう。これは私一人(ひとり)が別段(べつだん)勉強生でも何でもなし。同窓生(どうそうせい)は大抵(たいてい)みなそんなもので、およそ勉強ということについては、実にこの上に為(し)ようはないというほどに勉強していました。(以上、岩波文庫「福翁自伝」2005年5月第53刷発行700円、80ページより引用)」

Q この文章を読んで、何を考えましたか。

A 勉強がしたくなり本気になって勉強をするときには、誰に遠慮することなく——無論(むろん)迷惑(めいわく)をかけてはなりません——打ち込むのも面白いものだなと考えました。

Q 最後に一言どうぞ。

A 福沢諭吉先生は、「福翁自伝」の最後のページで、「私の生涯の中(うち)に出来(でか)してみたいと思うところは」と次の「三か条」をあげておられます。

- (1)「全国男女の気品を次第次第に高尚(こうしょう)に導いて真実文明の名に恥(は)ずかしくないようにすること」
- (2)「仏法(仏教のこと 林:注)にても耶蘇教(やそきょう、キリスト教のこと 林:注)にても孰(い)ずれにても宜(よろ)しい、これ(宗教というもの 林:注)を引き立てて多数の民心を和(やわ)らげるようにすること」
- (3)「大いに金を投じて有形無形、高尚なる学理を研究させるようにすること」(前掲書 317 ページより引用)

「品性」と「宗教」、「学問」の大切さをこのようにお示しになりました。皆様はどうお考えになりますか。

福沢諭吉著、富田正文校訂「新訂福翁自伝」(岩波文庫、2005 年刊)より引用させていただきました。何歳になっても、時間をおつくりになり是非折に触れて全文をお読みになることをお勧めいたします。

2005 年 8 月 24 日 ハノイ(ベトナム)にて記す